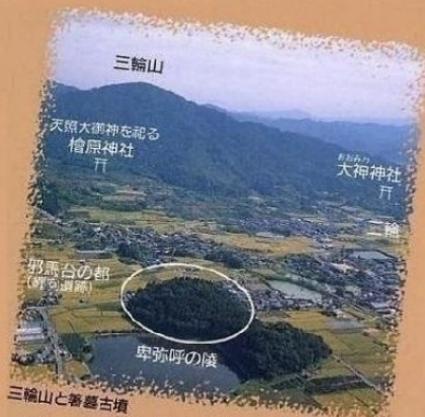


やま と
邪馬台 三国志
ダイジェスト版



神武は大和朝廷の開祖
天照大御神は卑弥呼

高田康利著

邪馬台国史が見えた **邪馬台国時代の歴史を物語に**

中国の三国志、日本の戦国時代・幕末をはるかに凌駕する世界に誇れる歴史です。

前五世紀から倭国大乱まで、那珂つ国と天の国、オロチ殿の国、倭国、豊葦原中つ国、伊都国、倭奴国の王朝が立て続けに興った。

二世紀後半、伊弉諾の御世、畿内勢が謀反して大乱が勃発した。倭奴国王朝は瓦解し、日向に天照大御神（日神）を仰ぐ高天、大倭に天照大神（日神の婿養子）率いる邪馬台国に分裂した。

二二〇年代、日神は大倭に遷座して、倭の女王ヒミコに共立された。

三世紀後半、日向から東征した磐余彦（神武）が火明饒速日（火瓊瓊杵の兄、海幸彦）の建てた日本朝を倒し、橿原に大和朝廷を開いた。

本書の王系譜 (倭奴国王朝(天地) ↓ 高天(天之国)、豊葦原中つ国(奴国)、邪馬台国(瑞穗蔽之國)に分裂) 1

180年代前半 / 大乱 220年代前半 250年頃 301年に大和朝廷樹立

〔倭奴国〕和国 伊弉諾 伊弉諾 伊弉册 伊弉冉 伊弉冉分身

天之尾羽張

(天神)

日向津姫 / 日神

(天神)

火瓊瓊杵 火火出見

笠沙 / 西都市妻

都城市

霧島市

始馭天下之天皇「初国知らし」天皇

(宮都) 糸島市平原

高千穂町

纏向宮入り

2 トヨ

3 倭迹迹日百襲姫

宮崎市多那里宮

高島宮

檀原宮

〔邪馬台国〕倭女王

(宮都)

(天神)

(倭王 / 天神)

(都督 / 倭王)

(都督)

唐古・健

天照大神 - 天鹿兒山

垂仁(饒速日 / 天火明 / 火明饒速日)

景行

成務

仲哀

神功

黒田

堺原

春日

磯城瑞籬宮

〔大日本国〕

(宮都)

綏靖

大倭葛木

孝靈

孝元

開化

御間城入彦五十瓊殖

◇伊弉諾夫妻の実子・養子・養女・人質、伊弉冉分身

伊弉諾

伊弉冉

伊弉冉分身

白山神、菊理媛

稚産靈(豊受姫の母、日神分身)

稚日女(丹生都比売襲名)

(人質) 少童(海神)三神、筒男(住吉)三神、海神本家筋宗女、大山祇宗女、闇霧ら
(主家嫡子の帝王教育) 向津姫(天照大神) ↓ 日向津姫(天照大神) ↓ ヒミコ、天照皇太神(天照大神) ↓ 天照大神、素戔嗚ら
(実子) 日子(蛭児) ↓ 蛭子、天事代主、火軻遇突智(火産靈)
(養女) 大宜都比売、丹生都比売の埴山姫(大宜都比売襲名) ↓ 大氣津比売 ↓ 埴山姫、罔象女

日向津姫(天照大神) ↓ 日向津姫(天照大神) ↓ ヒミコ、天照皇太神(天照大神) ↓ 天照大神、素戔嗚ら
(養女) 大宜都比売、丹生都比売の埴山姫(大宜都比売襲名) ↓ 大氣津比売 ↓ 埴山姫、罔象女
(伊弉冉分身) 白山神、菊理媛 / 稚産靈(豊受姫の母、日神分身) 稚日女 ↓ 丹生都比売襲名

『邪馬台三国志』ダイジェスト版（令和六年十二月改訂版）

目次

◇家長と祭器 ◇倭国王朝／倭奴国王朝／高天と邪馬台の国のかたち
倭国の生い立ち ●那珂つ国

●天の国とオロチ敵之国王朝／太伯ら子孫と越オロチ族 ●倭国王朝の建国
倭奴国王朝 ●豊葦原中つ国と伊都国の王朝 ●倭奴国王朝

倭国大乱と邪馬台国 ◇南伝仏教の東アジア流入 ●神国と常世づくりと伊奘諾

●豊受皇太神 ●倭国大乱 ●伊奘諾の南遷 ●二人の天照大（御）神

東西の王朝 ●日神の出現 ●天石窟 ●オロチ退治 ●天日槍襲来

●天照大神、高千穂宮へ／天孫饒速日の天降り

●葦原中つ国平定 ●天孫瓊瓊杵の出現 ●皇孫火瓊瓊杵の天降りと日隈（日前）再興

●日神の畿内遷座 ●天照大神（高皇産霊）の湖西高島宮と天成神道

倭の女王 ●倭の女王ヒミコと纏向上之宮／皇孫火瓊瓊杵の日前国西都と天孫天火明の日高見国東都

●皇子の交換 ●女王の朝貢 ●海幸彦と山幸彦 ●内部抗争

●火明饒速日（海幸彦）の天降り ●女王の伊勢遷座

日本王朝と日前の対立 ●女王トヨ ●一都七道制 ●天神火明饒速日

●太子 磐余彦 ●景行の熊襲征伐 ●和玉 磐余彦 ●仲哀の熊襲征伐

天下は一つ、家は一つ（神武東征） ●東征出発 ●筑紫国の奪還

●新羅遠征 ●吉備征伐／高島宮／出雲征伐 ●生駒の敗北

●熊野上陸／熊野権現の神倉山垂迹

●日前宮の創祀／日本に迫る ●日本の降伏

大和朝廷の成立 ●橿原宮 ●日本武尊の北伐 ●大和朝廷のはじまり1

●大和朝廷のはじまり2 ●皇祖天神に奉る郊祭

邪馬台国時代

倭奴国王朝

伊都国王朝
～倭国王朝～那珂つ国

◆ 繩文晩期の那珂つ国……死返玉・道返玉など玉八つに加えて、熊の神籬・蜂の領巾など玉つ宝十種
◆ 前五世紀の**天之国**……日鏡、奥つ鏡・辺つ鏡など鏡三面

◆ 前四世紀の**敵之国**……死返玉など玉五つ(もと那珂つ国祭器)、奥つ鏡・辺つ鏡(もと天之国祭器)に加えて、**敵之国**本家の宗像家 軍団を指揮する八握の細形銅劍(神璽)、船団を指揮する蛇の領巾など瑞宝十種

◆ 前四世紀の熊族(熊襲)：銅矛、日鏡(もと天之国祭器)、玉三つ(もと那珂つ国祭器)、熊の神籬など熊族神宝

◆ 前三世紀の**倭国王朝(高天)**……北方系銅鏡 日隈(熊野家)……瓊矛、日鏡・玉三つ、熊の神籬など日隈神宝

◆ 豊葦原中つ国の天叢雲……天璽の天叢雲劍、死返玉など玉五つ、奥つ鏡・辺つ鏡、蛇の領巾など瑞宝十種

◆ **敵之国**宗家の宗像家……玉五つ、奥つ鏡・辺つ鏡、八握の細形銅劍(天叢雲劍)、蛇の領巾など瑞宝十種

◆ **倭奴国王朝**初代女系天神の**天常立**……光武帝から賜る天璽の方格規矩鏡

◆ 日隈(熊野家)の伊奘諾……神璽の金印「漢委奴国王」、神璽の瓊矛・日鏡・熊の神籬など日隈神宝、
布都斯魂劍で倭奴国王朝と天神を守護

◆ 邪馬台国の水天神**天照大神**……新たに鑄た天璽の天叢雲劍(中細銅劍) 火天神**天鹿見山**……天璽の羽羽矢

◆ 宗像家宗女の田心姫……玉五つ、奥つ鏡・辺つ鏡、八握の細形銅劍(天叢雲劍)・蛇の領巾など瑞宝十種

◆ **日神の天照大御神**……石窟戸前で鑄た天璽の伊勢大神(三角縁神獸鏡) 倭女王**ヒミコ**……伊勢大神、魏帝鏡

◆ 素戔嗚……(方格規矩鏡)、神璽の金印「親魏倭王」、豪族に配る鏡(祭祀用八咫鏡と魏帝鏡)

◆ 高千穂宮の**高皇產靈**……日矛・日鏡など熊野家神宝、日前鏡、布都斯魂の十握劍で大蛇(天照大神親子)退治

◆ 高千穂宮に赴く**天照大神**……高千穂宮赴任前に鑄た布都御魂の十握劍、自身の神像としての天叢雲劍(中細銅劍)

◆ 高千穂宮に赴く**天照大神**……布都御魂劍に、「刃に血塗らずして倭国統一(高天十邪馬台国)」を誓う

◆ 日前の皇孫**火瓊瓊杵**……天神の御子と印す羽羽矢、石窟戸前で鑄た八咫鏡(日前鏡)・天叢雲劍など三種宝物

◆ 日本朝の**火明饒速日**……神璽の十握劍二振り(布都斯魂劍と布都御魂劍)、天神の御子と印す天璽の羽羽矢、

天神**天照国照彦火明**……鏡作郷で鑄た神璽の天照御魂神(天璽の鏡の形代、天照国照彦火明命) 天璽の瑞宝

布都斯魂・布都御魂の十握劍二振りに、倭国統合(日本朝による和国併合)を誓う

◆ 和の磐余彦……羽羽矢、日前鏡、葬送用八咫鏡、敵から手にした日矛(熊野権現御魂)・布都御魂劍

◆ **大和朝廷**の神武(磐余彦)……笠縫邑で新たに鑄た神璽の八咫鏡と草薙劍(天璽の鏡劍の形代)

◆ **火明饒速日子**孫の物部氏……布都御魂劍を授かり、朝廷と磐余彦火火出見の宮殿守護を誓う。瑞宝を朝廷に奉獻

倭国の生い立ち

●那珂つ国

縄文中期中頃(四五〇〇年前)になると、寒冷化が始まって関東や中部の遺跡は激減した。逆に、近畿を中心とする西日本のそれは急増しつつあった。このことは気温の降下期とも合致しているが、黄帝一門が四三〇〇年前に日本列島に渡ってくることや、水田稲作が中国大陸の四方八方に広がる時期とも無関係ではあるまい。そこで、こう考えたがどう思われるだろうか。

「黄帝のやり方を真似た彼らは、仁徳・慈愛の政を謳って福岡平野に神仙の国(神国)、那珂つ国を立ち上げると、東西南北四方に忠臣の四力国を配置して国邑を守ってきた。

その四力国は、土の神を称えて后土末裔と自負する北方の黄泉国(鬼国、闇見国、宗像・玄海から博多湾・玄界島にかけて展開)、同じく地の神を祀って黄帝一門と称する国東の杵築国、火神を奉って炎帝(神農氏)子孫と語る南方の火の国・その配下の熊族(熊襲、熊本平野以南に展開)、水の神を信奉する西方の海神大神(筑紫平野以西の海岸地帯や島嶼を守備)だった」

☆千余年後(前一一〇〇年代中頃)、即ち殷の天下が揺らぎ始めた頃に、太伯が周太王・古公宣父の長男として、ついで周王朝の皇祖となる武王が太王末子季歴の次男として誕生した。

こうした宗教・農法・生活習慣を背負った那珂つ国の軍勢が、山陽道・山陰道を突き進んで出雲・安芸・吉備・畿内に進出して分国を立ち上げ、先住民らに神国づくりや焼畑農法を教えてきた。後期末から縄文晩期にかけては、奈良盆地に出先機関を設けたり、東勢と交易するなどしてきた。これも広田遺跡・雲井遺跡(神戸市)・橿原遺跡・滋賀里遺跡などから、はっきり見て取れる。

晩期前半になると、那珂つ国は春秋期に横行した損得や我欲で以て人や物事に対処する気風に染まったのか、東の領土拡大に突っ走ったが、北や東から繰り出してきた縄文勢に押し戻された。

●天之国とオロチ敵之国王朝／太伯ら子孫と越オロチ族

前五世紀前半、越に滅ぼされた呉の一門は、生きる当てもない難民となって各地を流浪する者、東海上に乗り出す者、斉に隠れ潜む者、朝鮮や遼寧地方に脱出を図る者らが跡を絶たなかつた。そうした中で、ひとときわ明るい噂が彼らに舞い込んできた。

「東の海上に戦争も略奪もない蓬莱郷があると聞く。現に、そこから不老長寿の仙薬を携えながら渡って来た者もいるという」

この噂に夢をつないだのか、呉本家筋の太伯ら子孫は筏船や帆船を操りながら東海上に漕ぎ出すと、黒潮や対馬暖流に乗って琉球諸島沿いに北上し、島原半島や有明海沿岸に辿り着くらしい。

彼らはさらに東行して唐津湾岸や糸島平野に到ると、菜畑や曲り田など湿地帯に分け入って水田稲作に励む一方、祖霊が天に昇って太陽（日）になったと信じて先祖祭祀に入れ込んだ。いつ

の頃か天之国と銘打って、日鏡・奥（瀛、興）つ鏡・辺つ鏡で祖霊を日の神として奉ってきた。

ここに至る間、侵略者を追尾してきた熊本平野の熊族（熊襲）が擦り寄ってきた。天之国は彼らに誘導される形で福岡平野の那珂つ国にじわじわ近づいていった。

那珂つ国がこのよそ者にどう反応したかは知る由もないが、中国神話や考古学から推察する限りでは、那珂つ国は彼らに對して、

「古から伝わる天地開闢の神話にあるごとく、天之国と連携した天地なる国体の下で、東の縄文勢にあたるのが正道だ」という国論に落ち着いた模様だ。この結論は、四三〇〇年前に渡來した彼らの先祖が海神族を配下に取り込み、領土拡大に突っ走った先例に倣ったものらしい。

その後の天之国は、那珂つ国と好を深めると、呉国流国づくりや集落を濠で囲って身を守る術を教える一方、那珂つ国の集落に分け入って水田稲作を手ほどきするまでになった。

こうした努力を何代にもわたって積み重ねた結果、那珂つ国庇護下で天地と称して手を携え、摂

津六甲山南麓の生田川東岸（雲井遺跡）、奈良盆地（橿原遺跡）、琵琶湖南（滋賀里遺跡）まで進出することができた。そうした中で、那珂つ国と天之国は、天地連合軍と銘打って大がかりな東征軍を北陸や東海に送り込んだが、北と東から繰り出してきた縄文勢に押し戻された。

前三三四年ころ、今度は越が楚に滅ぼされた。越王は禹や夏后小康末裔のオロチ族とされる。

この時期に、長江、淮河流域、齊に広がっていた越人らは、楚の迫害を恐れるあまり、北の遼東や朝鮮に逃げ込むらしい。越が直接支配した地域でも、越オロチ一門が江南の海岸地帯に割拠しつつ再起を窺っていたが、いつの間にか楚の傘下に組み込まれていた。

その状況下で、本家筋に近い越オロチが郎党ともども帆船に分乗して、風の便りに聞き知った蓬萊三島に楽土を切り開くべく、東海上に漕ぎ出して行った。

この一団は琉球諸島沿いに北上して薩摩半島坊津辺りに襲来するや、瞬く間に半島を占領して堅固な足がかりを築いた。ついで遠征軍を編成して、不知火海・八代海・島原湾沿いに北上した。その狙いが肥沃な筑紫平野や、那珂つ国の都する福岡平野の攻略にあったのは言うまでもない。

この侵略者に対して、那珂つ国や天之国がどう立ち回ったかは伝承の一つすらないが、地名・考古学・後世の祭器の有り様から推測すると、以下のところに行き着いた模様だ。

「那珂つ国と天之国の連合軍はあっさり負けてしまい、那珂つ国は閩見国や杵築国ともども境界の出雲に追いやられ、国の名も中つ国と改名させられた。一方の天之国は、越オロチ旗下に組み込まれた上に、越流米づくりを強いられた」

その際、那珂つ国や天之国の配下らは、洞ヶ峠を決め込んだまま動こうとしなかった。

天之国にすり寄ってきた火の国の熊襲は、またも寝返って越オロチ傘下に潜り込むや、那珂つ国・天之国に襲いかかった。

その後の越オロチは、鰐族・山祇族・三嶋族らを従える海神大神と手を組み、みづたからとくき瑞宝十種を奉る

越オロチ本家の宗像家を共立すると、天之国が切り開いた曲り田・菜畑などの水田をことごとく没収して、その区画を広げて収穫増を図ったり、那珂川中流域の板付など湿地帯を開墾するなどして越流米づくりに邁進した。同時に、唐津湾岸と吉野ヶ里丘陵に一門重鎮を策封して大陸との交易や筑紫平野に睨みを利かせる一方、夏王朝のごとく筑紫島を九州に分けて統治し始めた。

やがて国のかたがちが整ってくると、時の宗像家家長は福岡平野板付に天宮してオロチ蔵之国王朝と銘打ちながら八握の細形銅劍(瑞宝十種の一つ)を天璽に奉り、先祖祭祀に明け暮れてきた。

その瑞宝十種とは、死返玉など玉五つ、奥つ鏡・辺つ鏡、軍団を統率する八握の細形銅劍、船団を指揮する蛇の領巾ひねなどだった。この内の玉五つは那珂つ国から奪った玉つ宝、鏡二面は天之国から強奪した神鏡だった。熊襲も那珂つ国から熊の神籬を取り戻した上に、羽太・足高・赤石の玉など玉三つを奪い、これに天之国からもぎ取った日鏡や先祖伝来の神杵を付け足し、熊族神宝として奉ってきた。

時がたつて、遼東や朝鮮に散らばっていた越遺民らは、オロチ蔵之国王朝が蓬萊島の領土を急速に拡大しつとあると聞くや、近隣の夷人や苗族、さらに朝鮮の人民まで誘って対馬海峡をひっきりなしに渡ってきた。そうした中で、王朝軍は怒涛の勢いで出雲、吉備、摂津、奈良盆地、近江盆地に東征して、要所要所に一門分国を策封すると、天之国勢を先鋒に押し立てながら北陸や東海に攻め入った。その結果、摂津に小千氏おち、奈良盆地に小蛇の三輪氏こわろち、出雲にオロチ佐太国、北陸に越(高志)こし、オロチが割拠してきて、板付遺跡・江道遺跡・牟礼遺跡・中西遺跡・服部遺跡などで、弥

